

政務調査研究視察 報告書

平成18年11月13日提出

視察日	平成18年10月31日(火) ～ 平成18年11月2日(木)	
視察先	岩手県一関市、岩手県紫波町、宮城県仙台市	
視察内容	「景観地区指定」と「電子自治体の推進」、「都市景観の策定」	
視察者	田口正夫、深瀬 稔、高野克一、清水勇、安形光征、梅村順一 (6名：10/31～11/2) 加納吉久、鈴木 豊、鈴木雅登、杉浦立美 (4名：10/31～11/1) 計10名	
岩手県一関市	<p><本寺地区景観計画について></p> <p>1 一関市の概要 人口：12万人 世帯数：41,358世帯 面積：1,133km²、県内一の面積、 東西6.3km、南北4.6km。山林57%、農地19%。 岩手県の南端に位置し、宮城県と秋田県に隣接。世界遺産を目指す骨寺村荘園遺跡は、今回の景観計画の調査内容である。 平成17年9月に、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村とが合併して、新「一関市」が誕生した。</p> <p>2 視察項目の概要 骨寺村荘園遺跡は、国指定重要文化財の「陸奥国骨寺絵図」そのままに寺社などが現存し、環境景観が良好に保たれて、現地に立って絵図の世界を実際に知ることができる大変まれな遺跡として、平成17年3月に国史跡として指定された。またこの地域は、本寺地区と呼ばれ、近世から近代にかけて緩やかな発展を遂げながら独特の農耕・居住のあり方を簡潔かつ十分に示していることから「一関本寺の農村景観」として、全国2番目の重要文化的景観に選定された。額田地域との合併も踏まえ、中山間地の農村景観保全に関する計画の位置づけを視察した。</p> <p>(1) 景観計画の位置づけ 地区景観を守ると同時に、世界遺産登録に向けた準備でもある。計画作りには、地域代表や学識経験者による委員会や住民説明会のより形成される。なおこの計画は、「景観法」に基づく計画である。</p> <p>(2) 地区景観の特徴 中尊寺に残る「陸奥国骨寺村絵図」は貴重な荘園絵図であり、農村の姿は現在の景観とよく似ていることが特徴。地形が変わらず、農家も昔ながらの伝統的な生活様式を保っていることが幸いして、地域景観の基本的な構造は中世絵図の世界を受け継いでいる。</p> <p>(3) 計画の目的 この地域の景観は、歴史と農村が織り成すものであり歴史的な価値がある。しかし、現実に生活していくには、景観を変えざるを得ないこともあり、景観保全と新たな景観形成とのバランスや、特徴ある景観を活かした新たな村づくりへの展開を検討することが計画の目的である。</p>	
	一関市	<p>[感想・岡崎市への反映] 本寺地区の景観計画に基づく景観条例は、平成18年4月1日に施行された。背景には、平成20年の世界遺産登録に向けた要件でもあるが、農村景観の保全が本格的に検討されることになった。市町村における都市計画に比べ景観計画は、農村における景観村づくりも対象とすることができる。景観条例による開発の規制をして地域の保全をすることになる。都市計画だけでなく中山間地を対象とした地域づくり計画のひとつとして景観形成マスタープラン策定の必要性を感じさせられた。今後、景観村づくりの仕組みが確立され、都市部と農村部それぞれの街づくり計画を実施することが期待される。</p>



<電子自治体の推進について>

1 岩手県紫波町の概要

人口：34,555人 面積：239km²
合併：1町8村 昭和30年4月1日、財政力指数 0.37

2 紫波町の概要

岩手県の中央部、伸びやかな平野と緩やかな丘陵地からなる。JR、新幹線、国道、紫波インターなど交通の大動脈が縦断。町民の力で紫波中央駅舎も完成した。自然環境と社会環境が程よく調和し、住環境に優れた田園都市を形成している。

3 視察項目の概要

今回の視察は、住基カードの発行枚数が、人口に対する普及率10.6%約3600枚発行されている要因を調査。また、電子自治体推進に関して、情報公開や広報活動に対して積極的な施策を展開していることを研究する。

(1) 住民基本台帳カードの普及と多目的利用

普及の必要性として、①住民サービスの向上（ICを利用した証明書自動交付機カード、券面を利用した町民優待）②身分証明書としての活用（金融機関や会員登録における身分照明）③行政サービスとしての利用（申告や社会保険、自動車登録などの手続）④カード発行機の有効利用（年間経費90万円）を住民にPRしている。このような普及により、自動交付機を導入することができ、行政サービスの向上が図れるとしている。なお奥州市とシステム協力をしており、維持管理の面での協力体制をとっている。

(2) 電子自治体としての取り組み

紫波町では地域情報化に取り組んでいる。これまで、図書ネットワークや学校インターネット3に取り組んできた。このたび岩手県立大学の協力を得て、IT基本戦略が策定された。IT推進委員会が10名により構成され、電子自治体推進委員会が実施計画を推進している。「ITを活用したまちづくり」を目的として、情報に関する4つの視点を掲げている。①リテラシーの向上、②コンテンツの充実、③インフラの整備、④セキュリティの確保である。また、3つの指標として、ネット普及率80%、メールアドレス取得率80%、全町ブロードバンド化100%を推進している。

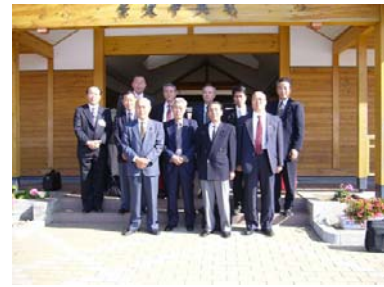
(3) これからの取り組みについて

次期基本計画（IT基本計画II）として、証明書等自動交付機の設置や双方向告知通信システムの構築が進められる。注目されるのは、安否確認システムと遠隔健康管理システムである。

安否確認システムは、独居高齢者を対象にテレビのリモコンから安否の情報を入力するものだ。テレビのスイッチを入れると、事前にサービスメニューが表示され4つのボタンから選択をして返信。もし調子が悪かったり連絡がほしい場合は、事前に登録されている人へ携帯電話へのメールが送信される仕組みとなっている。

遠隔健康管理システムは、健康管理端末に血圧、心電図、体重や体脂肪など日々の数値を入力。この情報を、医療・福祉従事者やボランティア等、住基カードなどの本人確認により許可された担当者が除法を閲覧し適切な処置をするものだ。

これらの次期基本計画をみて、住基カードによる本人確認が大きな役割を果たしている。今後カードと併用して、指紋や静脈確認による併用でセキュリティが高まることも考えられる。



紫波中央駅前にて



地域情報システム

岩手県紫波町

[感想・岡崎市への反映]

私たちを迎えてくれた紫波中央駅前の広場には、大きなモニュメントが配置してある。木造の駅舎は、地域住民の寄付によって造られたと説明を受けた。駅前には公共用地が準備され、住宅街を形成してある。岩手県の中央に位置する町は、交通の大動脈を活用した住環境を整えようとしている。町長の所信表明にも、電池自治体を目指した業務改善と住民サービス向上を宣言している。住基カードの活用も含め、岡崎市としても検討の余地があると感じた。

紫波町

<都市景観に関する施策について>

1 仙台市の概要

人口：997,199人、世帯数：427,624世帯
面積：783km²、市制施行 1889年4月
予算額（一般会計）3,966億円、財政力指数 0.81

2 仙台市の概要

仙台平野の中心に位置し江戸時代は、伊達62万石の城下町。明治以降は、「東北の治府」と呼ばれ、各種教育機関の開設により、「学都」とも呼ばれた。都市部で市街地と緑が共存する町並みから「杜の都」とも呼ばれている。



3 視察項目の概要

(1) 杜の都の景観条例のきっかけ

杜の都といわれるように仙台市は、自然に囲まれた町である。広瀬川や青葉山の自然や、寺社や屋敷跡にある緑が町全体を包んでいる。この緑の風景は昭和20年の仙台空襲で失われた。市民は力を合わせて緑豊かな町へと再生させる。杜の都の風土をはぐくむ景観作りはここから始まった。

(2) 条例の体系

3つの原則（考えや行動の基準）と、7つの方策（具体的な景観づくり）によって構成されている。この条例は、市民・事業者・市が一体となって、望ましい都市景観を確保発展させていくための基本となる。

(3) 景観7方策について

①景観基本計画（先導的な景観推進方策）②景観形成地区（重点的に景観形成を図る地域指定。定禅寺通と宮城野通）③大規模建造物等指針（周辺への影響を考慮して調和を図る）④景観重要建造物などの指定（歴史的、文化的建造物などの保全整備）⑤景観協定の締結と景観形成協議会の認定（自主的な地域のまちづくりを景観形成に向けて支援）⑥表彰と助成などの実施（景観形成に寄与している建築物や活動を応援）⑦景観審議会等の設置（重要事項の審議会や地域情報を得る景観サポーターの設置）

(4) 屋外広告物について

屋外広告物は、市民へ身近な情報を伝える手段として有効であるが、広告物が無秩序な状態で氾濫すると、街の景観を損ねることがあり、時には住民に思わぬ危害を及ぼすことがある。そこで屋外広告物が適正に掲出されるように、条例によるルールを定めている。



宮
城
県
仙
台
市

仙
台
市

[感想・岡崎市への反映]

「杜の都」仙台市を視察して、広瀬川や青葉山を配した形状と、豊かな緑と自然が町並みを包み込んでいることを感じた。空襲により焼け野原となった市内の復興を望んだのは、市民一人ひとりの思いであろう。景観地区として選定された、定禅寺通には1mほどのケヤキ苗木が植えられた。市民の愛着によりケヤキ並木は大きく成長し、日本一の並木道となった。推進委員である景観サポーターは、景観形成の上で大変重要な役割があると実感した。地域住民の意見を反映させながら、街づくりを地域主体で実施していくことが必要である。

岡崎市は、行財政の豊かの中核市である。都市計画の見直しの上で、景観法も視野にいた基本計画の策定が大切だと感じる。額田地域を取り込んだ新岡崎市は、総合計画として、都市計画、農村計画、景観計画を取り込んだバランスの良い街づくりを期待したい。心休まる「杜の都」仙台市を視察した議員団の感想である。